

しかし、この日の日本軍は絶対に引き返さなかった。死体を乗り越え、乗り越えて何十波という集団で突き進んで、主力は米歩兵第一〇五連隊、第一、第二大隊の第一線を突破して、後方の砲兵陣地まで突入した。第一大隊長は味方の斉射を浴びて戦死した。米軍は六五〇人以上の死傷者を出し逃げまどった。

日本人はこの「バンザイ突撃」を最後にして散っていった。「悲劇のサイパン」であった。

夫を国に捧げた

戦後の苦難

神奈川県 橋本 喜美子

私は、長崎県対馬厳原町の生まれです。故郷で定年六十歳まで勤めて、長男が東京の大学卒業後、厚木で勤務していますので、九州は遠いから近くに住んで欲しいということ、厚木市に住むようになり五年になります。

郷里は、県の出先機関も多く官庁や商店が多い町で、高い山と海に囲まれた静かな城下町です。当時対馬は、一つの町と三十位の村が一緒になり、現在は町村合併で町が多くなっています。町の真ん中に川が流れ、六メートルの高さの立派な護岸工事がしてある堤防があり、川幅四四メートル位の立派な川で、海へ流れています。

川には手摺のついた立派な橋があります。特に県道は広い道で、八幡宮、銀行、電話局、郵便局、ホテル、旅館、病院などがある大通りです。いつまで経っても故郷は忘れられない、懐かしいところです。

終戦後五十八年になり、私たち未亡人も少しずつ落ち着いた生活ができるようになった頃かと思えますが、未亡人も高齢になり、十年前の半数近くになり、ほんとうに寂しくなりました。平均年齢も八十五歳だそうです。

夫を失い、幼児を抱いて、若い妻が生活とたたかっ
てゆく姿は悲壮なものでした。私も主人が長崎市生ま

れで、長崎県庁勤務の時結婚し、半年で召集で中支の方に征きまして、二年余りで元気に復員してきました。子供もその留守に生まれて一年三カ月になっており可愛い盛りでしたので、その時は、二年半の誠に楽しい日々を送りました。

夫は復員してすぐ海軍の建築課の方に転職致し、二年半は佐世保で暮らしましたが、この度は軍属で、設営隊を引率して行く途中での戦死でした。

家を出たのは昭和十八（一九四三）年十二月二十日ごろでしたが、昭和十九年一月二十三日付けで「最後の使りになるかも」との手紙が横須賀から来ました。戦死の日は、公報によると同年一月三十一日ですから、横須賀を出発してから一週間で戦死しています。戦死の場所は内南洋方面、北緯九度一五分、東経一四七度、所属部隊は第二二設営隊、乗船した船は「靖国丸」でした。

「戸籍謄本には、こんなに詳しくは記載してありませんが、このたび靖国神社創立一三〇年記念事業の奉賛

会に入会致して、遺族会の方から立派な「祭神之記」を戴き、仏壇に飾っています。これには先程記しました戦死の場所が詳しく書いてあります。子々孫々まで残るかと思えます。

昭和十九年八月ごろ戦死の公報を受け、十一月ごろ福岡での海軍葬で遺骨を戴きましたが、中には名刺判の写真だけでした。目的地に着かなくて、ほんとうに本人も残念だったと思います。

家を出る時、二人の子供を交代で抱いて、頬ずりして頭を撫でて、言葉もなく手を振った姿が思い出されます。私には、ただ「子供を頼む」という言葉のみでした。暗闇の海中のどこにいるかと思うと、手を合わす度に亡き主人のことを思い出します。

一家の柱を失った遺族、特に子供を失った老親、夫を失って幼児を抱えての若い妻の生活と戦ってゆく姿は言葉に言いつくせないような悲壮なものでした。物心、両面の苦痛に、皆頑張って生き抜いてきました。一人息子さんの帰りを待って引揚船の着く舞鶴に立つ

て、毎日帰りを待っておられたお母さんも、嬉しい便りも聞けなくて亡くなられたそうで、歌でお気持ちが分かり、私も今でも時々歌って見ますが、胸が熱くなります。

私も一歳と三歳の子供を抱え、働くに働けず、下の子が二歳になるのを待って、子供を連れて授産所で働きました。しかしそこでは洋裁の仕事で、いくら収入はありましたが、三人が生活のできる収入はありません。明けても暮れても、生活のこと、先々のことを考えると不安がいっぱいでした。家も畑の付いた家を借りて食料の補給にと畑仕事もし、また営林署が有りますして、一月〜三月に掛けて国有林の落ち木拾いの許可が下りると、歩いて二時間もかかる山でしたが、その薪採りに山へ行きました。田舎の親戚がありました、子供を預けて農繁期の時には手伝いに行き、慣れない仕事も一人三役でこなして参りました。

昼は授産所で働き、夜は夜で洋裁の仕事を一针でも

と頑張りました。現在のようには物が豊富で、何でも手に入る時代、当時のことを考えますと夢のようです。子供に涙を見せまいと強く生きなくてはと、子供の寝顔を見ると涙に暮れる生活でした。

精神的にもいろいろなことが重くのしかかり、自分でもよく頑張ったと思います。子供に父親のいない淋しさを感じさせまいと、ほんとうに未亡人は強くなつた、いいえ強くないと生きることの難しい時代でした。

英霊の顕彰と慰霊に努めると同時に我が身に味わつた戦争の惨苦を、再びわが子々孫々に繰り返さぬよう、平和日本を建設することこそが我々遺族に与えられた使命と存じます。

東京都も三月十日は大空襲があり、多くの方々の犠牲の上にこんな平和があることを忘れないで欲しいと、三月十日を「平和の日」として設けられたとニュースで見ました。戦場に行かなくても国内にもたくさんの方々の犠牲者を出しました。ほんとうに世界全体が平和な暮らしのできるよう願わずにはいられません。

英霊もそれを念じて亡くなったと思います。

子供達もよく頑張ってくれました。子供こそ大きな犠牲です。就職にも父親がいないと不利なことも多かった時代でした。子供に勇気づけられ、また嬉しいこともいろいろと与えてくれました。

長男は小、中学を通して級長で頑張りました、また五年生の時、健康優良児で朝日新聞に写真入りで掲載されました。これも励みになりました。次男は、勉強には力を入れなくて、高校三年間を通して柔道、体育に力を入れ、たくましく成長しました。二人とも優しい子供になってくれました。しかし、時には親のない淋しさもあつたと思います。

次男は近くに同じ年の子供がお父さんとおぶさつて銭湯に行くのを見て「僕にはなぜ、お父さんがいないの」と言つて、親子で抱き合つて泣いたこともありませう。子供も六十二歳、五十九歳になり、親の責任は果たしたような気になる最近です。

私たち厚木市遺族会婦人部は、毎年二月に一泊二日

で箱根で、神奈川県婦人部研修会を実施し、遺族会の火を消さないように頑張っています。そして最後に『靖国の妻』の歌を歌つて解散しています。

私も三十一歳の折、郷里の県立高校に雇いで就職できまして、二年目に公務員の試験を受けて、県より会計と庶務の辞令を頂いて二十九年、定年まで勤めることができました。残り少なくなった余生を力いっぱい生き抜いていきたいと思ひます。

戦争で父を、そして一年後に 母を病死で失つて

神奈川県 三橋 功

私は昭和十四（一九三九）年一月一日に姉・私・妹・弟の兄弟四人の長男として生まれました。実際には、前年の十二月二十六日の生まれだそうですが、先々の徴兵検査のことなどを考へてのことだったようです。その二年後の昭和十六年十二月八日、真珠湾攻